

伊勢日記私注(三)

―はじめての人―

松原輝美

第二段

・ ・ ・ (こ) (ぬれ) (我を) (よも) (もと)
かく人の婿になりければ、今は・ ・ ・ とはじと思ひて、

(ける) (行きて) (女) ・ ・ ・ ・ ・
ありし・大和に・ ・ ・ しばしあらむと思ひて、かくいひやりけ

る。

三、三輪の山いかに待ち見む年経ともたづぬる人もあらじと思へば

(まだあるほどに、心ぼそげにのたまへれば、いみじくあはれになむ。
枇杷の大臣の御返し、

「たづぬる人も」とあるは、人わろくも)
・ ・ ・ ・ ・

四、もろこしの吉野の山にこもるとも思は・む人に・我おくれめや
(おくれ) (と思ふ) (ならなくに)

(男これをいとあはれと思ひて、返しをばえせで、かくよみたりけ
この歌返し、男詠みて、奈良坂よりおこせける

る) (枇杷の大臣)

五、世をうみの泡と浮きたる身にしあればうらむることぞ数なかり
(消えにし) (まさ)

ける

(奈良坂のわたりにぞ追ひつきておこせたりける)

・ ・ ・ ・ ・

(の)

女・返し、

(を)

六、わたつうみと頼めしことのおせぬれば我ぞわが身のうらはうら

むる

(とてぞ、道中にて、かへしやりける)

.....

【通解】

はじめての人であつた仲平の背信に泣いた前段を承けて、本段は、その悲しみを癒すべく父の許に旅立つ伊勢の傷心と、これを送る仲平の悔恨にも似た思いを叙した場面である。本段は、その二人のこゝろを叙するにより近い定家書写本系統の本文を採り、通解の口語訳は、前段で依拠した西本願寺本系統（一類本）の本文を離れて、三類本で付けてみることにする。

こんな風にして（仲平様は）大将家に簪入りをしてしまわれました

ので、（主人伊勢は）今となつてはよもや、私を訪ねて来ることなどないであろうと思ひまして、宮仕えにあがる以前に（父君と）お住いになっていた大和で暫くの時を過ごそうと思ひ（決め）まして、（仲平様に、こんな風に言つておやりになつたのです。）

私が今志すところは、「恋しくはとぶらひ来ませ」と古歌に詠まれた、あの大和国三輪の山麓ですが、そこでどんなに待つてあなたにお目にかかれることでしょうか。いくら年が経つても、あなたは訪ねてくれるはずもないと思ひますので。

まだ都にいる間に、心細そうに、このようにおっしゃいましたので、私どももひどく沈んだ思いをしたものでございます。それにしても「あなたは訪ねてなぐれはしないのでしょね」などと言うのは、本当にみつももないことですよ。

（ところで、主人の歌に対する仲平様のお歌は）

たとえ、もろこしの吉野山だとて、そなたがお入りになるのなら、ついて行かないと思うような私ではありませぬ。どこへなりとついて参りますとも。

（とお伺い致しましたが）仲平様は主人の歌にひどく心打たれまして、返歌がお出来にならず、この歌を独りごたれたそうに、（人伝てに聞いたものでございます。）（後略）

【注解】

○かく人の婿になりにければ、今はとはじと思ひて、「かく人の婿になりければ」という、二類本はこれを欠くその既定の条件句を承けて、一・三類本に「今はとはじ」とある。そのうちの「じ」を否定の意志表現と見、「とふ」を「問ふ」、つまり「問いただす」と見、併せて「問いただすまい」と読む。そう読んで、決して仮初のものではなかった仲平との関係を、みずから葬ろうとする伊勢の断固とした姿勢を、そこにみようとすると秋山氏のお考えもあるが、こゝはやはり、「我を」の目的語を置いた三類本に従って（二類本も「いまは我をばよもとはじ」とあり、三類本に同意である）、「もはや今となつては、私を訪ねて来ることもないであろう」と読みたいところである。その方が、次の伊勢の歌に「たづぬる人もあらじ」とあるのに自然にひびき合うし、序に言えば、同じ三類本のその後「まだ（都に）あるほどに、（女の）心ぼそげにのたまへれば、いみじくあはれになむ。」とつけてゆく物語の伏線にもなるからである。前第一段の、仲平を生垣の外に置いて、「涙さへ」の返歌に、彼への挑み心を、更には、不実な彼の存在を突きぬけて、今は己と自立せんとする心の高揚を歌った伊勢も、時間の沈静の中で、大方の世の女と等しなみの諦観に生きようと努めているのである。

○ありし大和にしばしあらむと思ひて、この条、三類本では「も」とありける大和に」とある。一類本の「ありし」の記述が、いまだ実録的な家集の態を強く残しているのに対して、「ありける」とある三類本の方は、物語化の度合を強めているが、いずれにしても、伊勢はかつて親と共に大和国に住んでいたことになる。とすれば、彼女の宮仕えは継蔭の伊勢守在任中のことではなく、父が大和守になった寛平三年（八九一年）正月以降ということになるうか。しかし、宮仕えの後も、山城国からすれば隣接する父の任地に往復し、滞留することがあり得たとすれば、必ずしもそう断定すべきでもあるまい、と言った秋山氏の疑義が提出されて来るのだが、稿者は、次の贈答歌も含めて、この条、そしてこの一段は、『古今和歌集』恋歌部五、780番歌の伊勢の歌と、その詞書及び、同集雑体部・誹諧歌の¹⁰⁴⁹1049番歌で、「左のおほいまうちぎみ」と作者記名のある歌との両者を探って、これを物語として延展構成したものではないかと思っている。その恋部780番歌は、

ちちがやまとのかみに侍りけるを、かれがたになりにければ、
ける 伊勢

780 みわの山いかにまちみん年ふともたづぬる人もあらじと思へば
とある。仲平が「かれがたにな」ったのは、伊勢の出仕の翌々年と推定されるが、その年は、父の継蔭が大和守に任じた寛平三年（八九一

年)のことゆえ、「ちちがやまとのかみに侍りけるもとへまかる」と言う歌の詞書とも符号する。この符号は、前第一段に描かれた、伊勢と仲平の二人の恋のはじまりとその終わりを語る条を越えて、『伊勢集』冒頭部の書き出しの一文「寛平みかどの御時、大御息所と聞こえける御局に、大和に親ある人さぶらひけり」に物語として呼応しているのである。事実としては、伊勢の出仕はやはり、父継蔭の伊勢守(仁和二年(八八六年)任)在任中の寛平元年(八八九年)頃のことであり、『古今和歌集目錄』に「継蔭為伊勢守之比号伊勢歟」とある候名の所以は動かないと思う。

○「三輪の山いかに待ち見む」の伊勢の贈歌 伊勢は、傷心を癒すために、父の膝下で暫くの時を過ごそうと都を離れるのであるが、それに先立ってこの歌を仲平の許に届けたのである。この歌は、貫之の土左守在任中(延長八年(九三〇年)→承平四年(九三四年))に撰述された『新撰和歌』以降『古今和歌六帖』『金玉集』『深窓秘抄』『三十人撰』その他にも撰入されて、古来から秀歌と目されて来たものであるが、前条に挙げた通り、既に『古今和歌集』に撰集されるに当って、早くから、人口に膾炙していたことでもあろう。延喜五年(九〇五年)、『古今和歌集』撰進の年、伊勢はその推定年齢で29歳から34歳位の盛年の直中にあった。宮廷第一位の女流歌人の若き日の恋の歌は、どんなに多くの人の関心を惹いたことであろうか。ところで

この歌は、言うまでもなくこれもまた、当時の宮廷人の愛誦するところであったと思われる『古今和歌集』雑歌部、982番歌、

わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門

を本歌としている。「詠人知らず」のこの本歌は、長い口承の時間を経過して、それなりに多くの挿話を生んで来たであろうと想像される伝承歌であるが、伊勢は、その本歌にある、意中の人の訪れを指嗾する呼びかけのこころを反転させて、

私が今志すところは、「恋しくはとぶらひ来ませ」と古歌に詠まれたあの大和の国三輪の山麓ですが、そこで、どんなに待ってあなたにお目にかかれることでしょうか。

いくら年が経っても、あなたは訪ねてくれるはずもないと思いますので。

と言っている。複雑な情感をすらりと詠みなし、余情纏綿としてなるほど秀歌であると言えよう、と評された関根慶子氏(『伊勢』八『日本歌人講座 中古の歌人』)の評を承けて、秋山氏は、いかにも、この歌には複雑な情感がこめられ、それは、相手に対する皮肉とも取れるし、拗ねも感取される。そして、想う人の訪れを期待する本歌の伝承歌を下に敷衍しているだけに、そこにはおのずからなる男への未練もにじみ出ていると言えよう、と言われた。伊勢は、いま、大方の世の女の歩いた諦観の道を生きようと努めながらやはり、それはかなわ

ないのである。

○枇杷の大臣の御返し　こゝは、二類本では「おとこの返し」となっている。恐らく、これが本来の形だったのであろう。片桐氏も言われる通り、今まで仲平のことを、「御息所の御弟」或はたゞ単に「男」とだけ書いて来ていて、こゝでいきなり「枇杷の大臣」というのは余りに唐突過ぎる。それに、仲平が弟の忠平にさえ、20年も先を越されて、やっと右大臣になったのは、承平三年（九三三年）、彼の59歳の時のことであり、左大臣昇格は、更にその四年後の承平七年（九三七年）のことである。それは、今のこの時点からは、46年も後のことである。こゝは、関根慶子氏の処置されたように、その後の極官を注記していたものが本文化されたものか、或は『伊勢集』の冒頭に物語化される以前の家集形態の段階のものが残存したのであろう、と考えていゝところかも知れない。いずれにしても、歌物語的な『伊勢集』の冒頭部分としては、未整理の難をまぬかれないところである。

そこで稿者は、この条は、一類本の本文は捨て、都落ちしてゆく伊勢の心情にまで踏み込んで、物語化を徹底してゆく三類本を取りたいと思う。最初に掲げた本文で見る通り、物語化の徹底というよりも、むしろそこには、物語の語り手の素顔までもがのぞいているようにさえ思えるのである。

まだ都に在る間に、心細そうに、このようにおっしゃいましたので、

私どももひどくしみじみとした気分になったものでございます。それにしても、「たづぬる人もあらじと思へば」などと言うのは、体裁が悪いことですよ。

という。「心ぼそげにのたまへれば」と伊勢に対して敬語を用い、伊勢が「たづぬる人も」と詠んだことを、体裁が悪い、人聞きが悪いと批評している。（片桐氏『伊勢』の訳注）この三類本の本文について、一・二類本から三類本へと物語化の進む過程を、そこに読み得るにしても、三番歌について注記するこのあたりの部分は、あらずもがなの説明に墮していることも否めない。「心ぼそげにのたまへれば」というような敬語使用も、前後の文体に調和しない恣意性を証すものである、と秋山氏は言われる。

確かに、例えば、第六段末で、同じく仲平に贈った伊勢の歌を評して、「と言ひければ、人々宵の目さましてなむあはれがりけり」と書いてある、その直截な客観描写に比較すれば、こゝのところの叙述は、主観的な説明に過ぎ、文体も前後のそれと打ち合わせ恣意的なものではある。だが、その銚舌と文体の齟齬とは、伊勢に肩入れするあまりの、語り手の、或は物語作者の筆の滑りとみられはしないか。雑然と歌稿の編集されている『伊勢集』の後続家集から、これを切り離して、その冒頭部に於いて、歌物語風に、或は歌日記風に、伊勢の前半生を象って行った『伊勢集』冒頭部分の語り手、或は作者は、伊勢の身

近かに仕えて、伊勢を敬愛し、伊勢のことならすべてを知り尽していた、そして、愛情の世界に於ける伊勢のその苦悩の始終を見届けて来た彼女の侍女格と聞いて、女房たちではなかったか。その女房が、愛情世界に傷ついてゆく伊勢の境涯を描きながら、そのいまだ稚い主人伊勢であるがゆえに、「まだあるほどに云々」と、伊勢への思いを頭にしてゆくのである。

○「もろこしの吉野の山に」の仲平の返歌 前記の通り、この歌は、こゝのこの物語的一段を構成するために、先の伊勢の歌と同時に『古今和歌集』から採って来たものであろうと稿者は思うのだが、それは、同集の雑体部誹諧歌の中に「題しらず」として、三類本と同じ表現で収められている。そして、作者は「左のおほいまうちぎみ」と明記されている。仲平も左大臣になつてはいるが、それは前述の通り、ずっと遅れて承平七年（九三七年）のこと、『古今和歌集』撰進の時点の延喜五年（九〇五年）に左大臣の職にあったのは兄の時平である。諸家の説く通り、『古今和歌集』の作者記名は信頼できるものであるから、この歌の作者は時平と断じてよからう。ところがこゝでは、仲平の返歌として語られている。

この作者が齟齬することについて、『古今和歌集』の左大臣を後人の変改とする推定（契沖の『古今余材抄』）、或は『伊勢集』の仲平の返歌を偽作であるという断定（加茂真淵の『古今和歌集打聴』、香川

景樹の『古今和歌集正義』、金子元臣の『古今和歌集評釈』）、或はまた、『伊勢集』のそれは、兄時平の代作ではないかという想定（臼田甚五郎氏『伊勢』△平安女流歌人▽）など、さまざまに言われている中でも特に傾聴に値すると秋山氏の言われる片桐氏のお考えは、『伊勢集』の編者は『古今集』にこの歌が時平の歌として存在することを読者も知っているであろうことを逆手にとって、いや実は、仲平の歌なのだと言う伝承もあるのだというポーズで、このようにまとめあげたのであろう、と言うものである。「勢語」が『万葉集』の歌をはじめとして、明らかに在原業平ならざる人の歌を大いに利用して、主人公の歌としてその章段をまとめあげているのと同断である、と言われるのである。

言われるように、『伊勢集』の作者は、『古今和歌集』では「題しらず」とあって、その作歌事情さえもよく分からぬ時平の歌を、実は仲平の返歌なのだと言って、こゝに採つて来る。そして「もろこしの吉野の山にこもるとも」という誇大な措辞を配するだけの、言葉が言葉として空転しているだけの歌、それは、伊勢の、男に対する抗議とも未練ともそのあわいを確とは判じかねるような複雑な女の情感を詠出した歌とはおよそかみ合わない、その歌をこゝに番える。そうすることで、遂には睦み合うことなく行き違ってゆく女と男の心の風景を鮮明化してゆく。確かに、こゝのこの段は『伊勢集』冒頭部分の中

でも、その物語化のいっそう進んだ章段とみるべきところである。

○この歌返し、男詠みて、奈良坂よりおこせける。この条から、次の五・六番歌の贈答にかけての部分、以前から不審の多いところであった。その不審については、先学によってさまざまに処理されて来たが、稿者はまず、この条については、四番歌の返歌の左注説を採りたい。

三・四番歌の贈答の場面が、『古今和歌集』から採られた二首の歌を使って延展開成された物語になっているという稿者の考えは、先に述べた通りであるが、その他ならぬ『古今和歌集』が、その採歌した歌に左注をつけることで、一篇の物語を構築しているのを『伊勢集』の作者は知悉していたのではないか。『古今和歌集』の左注に於ける物語の最たるものと言え、例の『勢語』の筒井筒章段に延展開成されて行ったと推定される⁹⁹⁴番歌の「風吹けば」の左注の、それがあ

る。
むろんこゝのこの条が、それに見合っているという気などは毛頭ないのだが、三類本の本文では、その左注は「男これ（伊勢の贈歌）をいとあはれと思ひて、返しをばえせで、かくよみたりける」とある。その一文には、男の密やかな悔恨が滲んで来るようである。秋山氏も言われたように、仲平が大将家に婿取られたからとて、それで、このひらを返すように伊勢との交わりが清算されたわけではあるまい。む

しろ、そのことによって、共に培って来たふたりの愛の絆のかけがえのなさが、仲平にはいままらながら痛感されたのではないか。伊勢から贈られて来た「三輪の山」の歌にこめられた女の、容易には片づけ切れぬ心に、ひとたび切れては二度とはつながらぬ愛のあわれを男は思う。そして急には、返し歌もかなわぬ男は、「もろこしの」と、思いを込めた精いっぱい措辞で独詠するのである。しかし、その歌が誇大な表現であればあるだけ、こゝろは空しく空転してゆくばかりなのだ。そして、何時からか住みつきはじめた悔恨が、ひそかに、而しはつきりと、男のこゝろを嘯む。

『たづぬる人も』とあるは、人わろくも（「あなたは訪ねてなどくればしないのでしょうね」などと言うのは、本当にみっともないことですよ。」と、作者としての客観の場を欠落して、伊勢への衷情を書く。その愛情の世界に於ける主人伊勢の稚なさに扼腕した作者女房は、同時に筆を返して、伊勢の傷心のその代償としてある仲平の悔恨のその貌を、「返しをばえせで、かくよみたりける」と、客観のその叙法に於いて描いてゆく。そうして、こゝに獲得されてゆく、他なからぬ作者女房の客観的な視点或は、叙法は、やがて伊勢の、恋の傷心より出でて生きるその転身の生を、自らの物語世界の中に、紛うことなく紡ぎ出してゆくことになるのである。それが、続く第三段の物語世界である。

○「世をうみの」と「わたつうみと」の贈答 恐らく『古今和歌集』をその出典として構成されたと想定される三・四番歌の贈答の場面が、その物語化に於いて成功しているのに較べると、こゝも恐らく、『後撰和歌集』を拠り所としたのに違いないと思われるこの贈答は、『伊勢集』冒頭部の、その物語の文脈の中に組み込まれることに於いて失敗した例と言わざるを得ない。

関根氏は、前条の「この歌返し云々」を、稿者もこれを採ったと同じ四番歌の左注的なものと解された。その結果、前後の文脈から浮き上っているこの贈答は、配置だけされて、比較的物語化の困難な箇所であったか、或は何かの事情で、物語化が後廻しにされて、こうした形態のまゝに残存する結果となったのであろう、と考えられている。

また、片桐氏は、この贈答のうち、仲平の贈答について言えば、「うみ」「泡」「うら」というように「海」の縁語をつらねているのは、「奈良坂のわたり」まで追いかけて贈った歌としては不自然に過ぎると思われる。そして、敢えて私見を言えばとしてこの贈答はこゝに配されるよりも、むしろ後に来る、十四番歌の「宵の間にはやなぐさめよ石の上ふりにし床もうちほらふべく」と、十五番歌の「わたつみとあれにし床を今さらにはらば袖や泡と消えなむ」の贈答と関係がある。『伊勢集』の場合の順序と違って、事實は、十四・十五番歌の方が先に詠まれ、「世をうみの」「わたつうみと」の贈答は、これを承

けて詠まれたものではなかったか、と言っておられる。この点については、秋山氏も同じご意見である。

【評】

伊勢と仲平の交渉の経緯は、『伊勢集』の冒頭部分では、なお数段、数年にわたって語られる訳だが、『古今和歌集』恋部五の810番歌の伊勢の歌は、この第二段の頃のことを詠んだものと解されていたのではないかと、その説話化されたものを、秋山氏が紹介されているのをこゝに挙げる。『今昔物語集』巻二十四、第四十七話に出るものである。原文のまゝ、挙げて置く。

伊勢御息所、幼時読和歌語 第四十七

今ハ昔、伊勢ノ御息所ノ、未ダ御息所ニモ不成デ七条ノ后ノ御許ニ候ヒケル比、枇杷ノ左大臣未ダ若クシテ少将ニテ有ケル程ニ、極ク忍テ通ヒ給ヒケルヲ、忍ブト為レドモ、人自然ラホノカニ其ノ気色ヲ見テケリ。其ノ後、少将通ヒ不給シテ、音無カリケレバ、此ク読テナム遣タリケル。伊勢、
人シレズ絶ナマシカバ、ワビツ、モナキ名ゾトダニイハマシモノヲ

ト。少将、此レヲ見テ、「哀レ」ナド思給ヒケム、返テナム此ノ

度ハ現ハレテ極ク思テ棲給ニケルトヤ。

この説話のまゝだと、この歌またこの話は、この段というよりは、前第一段の「親いか言はむと嘆きたりけるを、年頃経にければ、聞きつけてけり」(三類本)のあたり、二人の恋が破局に至る以前の、それが進行している頃のものになる。

第三段

大和に三月ばかりありけるに、
ひてありきけるに、

(住む・・・) (さうざうしく寺めぐりせむと思
(て・・・) (の十日

龍門といふ寺にまうでたりけり。正月・十一

あまりになむあり(る)(見ればその堂(あり) (滝は雲の中

日ばかりなり・・・けり。・・・この寺の・・・さまは、雲の中より

より(ちく) (仙・・・)(岩屋) (く)(つも

滝は落つるやうに見ゆ。山の人の家・といふは、いたう年経・

り) (の) (あはれに尊くおぼえて、涙落つ

て、岩の上に苔八重むしたり。・・・

る、滝に劣らず) (たぐひなくめでたく見えて)

見知らぬ心地に、いと悲しう・・・

(が)なく都思ひやられ (・・・石)

のみみはれにおほえ・て、涙は滝に劣らず。橋のもとにしばし

(ながむ) (この寺)

あ・・るに、・・・いと暗うなりぬ。「雨や降らむとすらむ」

(にあ) (々)そぎければ・・・「雨は降らじ」(など)・・

供な・る人といふ・・・・。法師ばら・・・・。「雪ぞ降らむ」

(雪さ)ばかりにて・・・

(る) (ある)

と言ふほどに、いみじうおほきなる雪かきくらし降れば、・・人々

(「ごん)

(ひければ)・・・

・・・「歌詠まむ」と言ふに・・・、この詣でたる人、

七、裁ち縫はぬ衣着し人も無きものをなに山姫の布さらすらむ。

・・・・ (今日)

と詠みたりければ、さらに異人詠まずなりにけり。いまは道に出

(こと)

でて、越部といふ所に宿りぬ。かの御寺のあはれなりしを・思ひ

(又)

出でて、・・、

(で)

(身の世に)るらむ

八、みもはず空に消えなで限りなく厭ふ憂き世に身の帰りくる。

とひとりごちて、袖もしぼるばかりに・泣きぬらしけり。

【通解】

大和滞在の三カ月は伊勢の傷心を癒すにはあまり短い時間ではあったが、仲平と離れているというそのことが、恋の破局に沈淪する、その自失の境を出でて、やがて新しい生に向うべき客観の視座を伊勢に与えてゆくのであった。通解の口語訳は、再び西本願寺本系統の本文にかえって、これで付けてゆくことにする。

主人伊勢の大和滞在は三カ月ばかりでございましたが、(その間に)龍門という寺への参詣にお供致しました。あれは寛平も四年のお正

月のことだったでしょうか。その寺の有様は（ずいぶんと壮大でございまして）庭にかゝる滝がまるで雲の中から落ちるようでございます。仙人たちが住んでいた家と申す所は、ひどく年を経て、岩の上には苔が重なるように生えておりました。（都住まいで）見慣れない私どもには、ひどく悲しく、（目に映る）すべての物が哀れに思われまして、流れる涙を止めかねたものでございました。橋のたもとで暫く立っておりますと、ひどく暗くなつて参りました。「雨かも知れないわね。」と（主人が）申しておりますと、（居合わせた）法師たちが、「雪でございますよ。」と言つうちに、大層大きい雪が目の前が見えなくなる程に降つて参りました。（そこで）私どもが（おもしろがつて）「歌を詠みましょうよ。」と言いますと、主人は、

裁つたり縫つたりしない衣を着たという仙人も今はいないのに、
どうして山姫は、このように大きい布をさらしているのか知ら。

（何だか、むなしくつて。）

と詠んだものですから、私どもも（すっかり悄気て）黙りこんでしまったものでございました。それから街道に出まして、越部という所に泊りました。（そこでも）あの御寺での哀れだったことが（いろいろに）思い出されまして、（主人は）

お寺もお山も今は朧ろ。こんなにも辛い命を引きずりながら、限りなく、いとわしいと思うこの人の世に、私はまた還つて来てしまつ

たのですね。

と独り言にそんな風に詠んで、（あとはもうただ悲しく）涙で袖もしぼる程に泣き濡らしたものでございました。

【注解】

○大和に三月ばかりありけるに、傷心の伊勢が「三輪の山」の歌を残して、都を発つたのは「なが月ばかりのこと」（第一段末の条）であつた。それから秋が過ぎて冬が来て、その冬も深まってゆく大和の国の明け暮れ、語る者としてない地方官の館での三カ月、どんな無聊が伊勢の上にあつたことか。この条の後に続く三類本の本文が、伊勢のその無聊を語る。その三類本に言う「さうざうし」を、新撰字鏡は「嘻囉、独坐不楽貌、佐久佐久志」と注する。それは、独り居て満たされぬ心的状態を言う。心の中に当然あるべきものを見出し得ずして、独り焦立つところである。伊勢に於いて、決して仮初のものではなかつた仲平との恋は、己が本然の己として生きることの証であつた苦である。それが、仲平の裏切によつて、と言つよりも、一介の女房と撰関家御曹司との仲であつてみれば当然の成り行きとして、世の女が引き受けねばならなかつたのと等しなみの苦悩の中にある、今のこの口惜しさ。それが自分にだけ特殊なものではないと思う、自分に於いてのみの特殊な苦悩であれば、むしろ昂然とそれを引き受けましょうが、

そうではないと思う、その居た、まれぬ傷心の独り居であり、それは二類本にいう「精進して寺めぐり」する、その如き外発的な行為によっては到底癒される筈もない焦心ではあった。だが、物語は、敢えてこゝに龍門詣での一段を設けて来るのである。

○龍門といふ寺にまうでたりけり。 「龍門」は奈良県吉野郡竜門

村の北、多武峰の東南にある竜門山（九〇四・三m）の上にあった龍門寺のことであるが、この寺には早くから、こゝに住んだという仙人についての古伝がある。（『今昔物語』『久米寺流記』『扶桑略記』

など）そのひとつ、『今昔物語』巻第十一、第二十四話に、

今ハ昔、大和国、吉野ノ郡ニ龍門寺ト言フ寺有リ。寺ニ二人ノ

人籠リ居テ仙ノ法ヲ行ヒケリ。其仙人ノ名ヲバ、一人ヲアツミト

言フ、一人ヲバ久米ト言フ。

とあり、アツミは先に仙人となつて空に昇る。久米も後に仙人となることが出来たのだが、空を飛ぶ間、吉野川ですゝぎをする若い女の白い脛に心穢れて其の女の前に落ちてしまふという例の話を伝えている。この二人について『久米寺流記』や『扶桑略記』は、これを三人として、今一人の同伴の仙の住んだ草庵は「有基無舎、餘両仙室、今猶在」として、この三人は常に竜門嶽（竜門寺）と葛木峰との間を飛行したことを記している。後の伊勢の歌の「裁ち縫はぬ衣着し人」は天衣無縫の衣を着たこの仙人たちのことを言い、その歌はこの寺に係

わるこれらの伝承を踏まえての詠であつた。

○この寺のさまは、雲の中より滝は落つるやうに見ゆ。山の人の家といふは、いたう年経て、岩の上に苔八重むしたり。この龍門寺

やそこに住んだと伝えられる仙人の住居のさまを描くこの対の文章は、初見の囁目の景にただ目を瞞るだけのものではない。「見知らぬ心地に」「あはれに尊くおぼえ、たぐひなくめでたく見え」（三類本）ると同時に、それはたぎり落つ滝にも劣らぬ涙を誘う景であつた。この伊勢の涙は何か。

やがて、堂宇と滝水と、それらを一色に包み込んで「いみじうおほきなる雪」が「かきくらし」降る。この景を「高い空から降る雪の白さと滝の水の白さを一体化してさらにスケールを大きくし」た自然のその偉大さと見、その大いなる大自然の前に「俗世にこだわり続ける我が身の小ささ」を片桐氏は対置させておられる。そういう見方に対して、この景に「大自然の孤独な表情」を見ておられる秋山氏の読み、稿者は惹かれる。即ち「幽寂な境内に立ち尽すうちに夕暮れが迫り、雨もよいの暗くおし垂れた雲はやがて雪を降らす。その雪の薄暮の中を滝水は依然としてたぎり落ちてゐる、この大自然の孤独な情景」と氏は言われている。それは「いと悲しう、もののみあはれにおぼえ」（一類本）させる、寂寥の極みにある孤独な自然の景であり、それはそのまゝ、「ものがなしく都思ひやらるる」（三類本）旅人の「涙」に

つながってゆく。宮仕えの生活の中で、愛に傷つき焦心する女心のゆえに、それは自然の寂寥の前に脆いのである。

○正月十一日ばかりなりけり。この、時の設定は強引に過ぎると片桐氏は言われる。一・二番歌の「紅葉」の頃から始まって、「大和に三月ばかり住むに・・・」を受けた叙述としては「正月の十日あまり」（片桐氏は三類本に依っておられる）の頃を龍門詣での時期にしなければならなかったのだろうが、雪深い吉野山系を一月に女の足で登ったとするのは、どうにも無理がある。加えて、滝の水の豊富さを歌に詠むのにふさわしくない時節でもある。ここはやはり、『伊勢集』のストーリーの展開のために、無理に設けられた場面だと考えるほかはないと氏は言われる。

これをやはり『伊勢集』のストーリーの進行の時間にあて、寛平四年（八九二）の正月十日過ぎのこと、すれば、それはユリウス暦で換算して八九二年二月十三日頃となる。雪深い吉野山系では正に「いみじう大きな雪かきくらし」日毎に降る厳冬の直中である。それは確かに、女人の足をばばむに十分な時節である。また、滝水がその水量の豊富を加える雪解けの出水期も遙かに先にある時節でもある。しかし伊勢には、或は『伊勢集』の作者には、そういう事実のディテールは関知するところではなかったのではないか。彼女たちの関心のうちにあったのは「雪かきくらし」降る薄暮の寂寥であり、その中に凝然

として佇立する傷心の我が身であり、それを我が上に置いてみる語手の、涕泣にも似た伊勢への自己投入の思いであったのではないかと。

○「裁ち縫はぬ衣着し人も」の伊勢の歌。前述の如く、「裁ち縫はぬ衣着し人」は、龍門寺に往んだという無縫の天衣を着た仙人のこと。こゝはそれを着てくれる仙人もいまはいないのに、唯甲斐もなく布を晒す山姫の業として瀑布がとらえられている。仲平との愛の情熱がひたむきであっただけに、今はそれがむなしい燃焼であったというほかない、その伊勢のやる方ない思いが、そこに、その唯甲斐もなく落ちたぎつ滝の形姿に投影されているのではないかと、秋山氏は言われる。と同時に、ひたむきであった男への愛のはかなさ、むなしさがそこにみつめられた。それがそこにみつめられたと言うことは、或は言葉を代えて言えば、愛のはかなさ、むなしさが客観の目を通して歌の言葉によって、画然とした秩序をもってそこに紡ぎ出されたと言ふことは、実は、そのむなしい愛の営為の向うに、その愛を越えて、新しく生き直そうとする自らを発見したということなのである。その時、伊勢を取り巻く薄暮の寂寥は、伊勢の心象風景の中を遠ざかってゆく。それは歌による傷心の昇華と言つていゝかも知れない。

続く一条に「さらに異人詠まずなりにけり。」とある左注的記述に、作者女房の、かくして傷心を克服してゆく主人伊勢に対する肯定の姿勢の、その客観的な視点よりする記述をみる事が出来る。

○いまは道に出でて、越部といふ所に宿りぬ。薄暮を辿って龍門

の山を下り、伊勢は越部の里に宿をとった。一・三類本に従えば、それは翌日の行程だったかも知れぬ。今、近畿日本鉄道吉野線に「越部」という駅があるが、その北側一帯が越部である。(片桐氏『伊勢』)現在の奈良県吉野郡大淀町越部、吉野川の川筋に沿う街道にそれはある。(秋山氏『伊勢』)そこでも、龍門寺での薄暮の雪の体験は消えず、次の一首を詠んで、伊勢は泣き濡れるのであった。

○「みもはてず空に消えなで」の伊勢の歌。「みもはてず」の

「み」は「見」と「身」を掛けて、「あはれに尊く、たぐひなくめでたく」(三類本) 見えた龍門寺の堂宇やめぐりの自然を見尽くすことも出来ず、の意と、我が「憂き身」(三類本) の果てることもなく生きのびての意の両意を持っているが、後の意により比重がかゝっているよう。「空に消えなで」は、龍門の仙人のように大空に飛翔して仙境に至ることも出来ず、この憂き身をひきずりながら、の意で、前の句の後の意に重なってそれを強めている。二類本にも「そこに消えなで」とある。一首の意は、人為の堂宇も自然の景観もおぼろにして、かくも憂き生きのいのちをひきずりながら、限りなくいとわしいと思う俗塵のうちに私はまた還って来てしまったことだ、というのだが、この

一首を評して片桐氏は、この歌は、情況説明がなく歌だけでは理解しにくい歌である。これは『伊勢集』冒頭の物語的部分がまとめられる

時に编者によって、この物語的部分の主題のために作られた歌だという可能性が強い、と言われた。稿者もそれに賛成なのであるが、唯その「物語的部分の主題」が、「初恋の人が他の女と結婚したショックから逃れるべく大和へ逃避し、寺めぐりをしたものの、結局はこの世から脱れがたく、都へ帰らざるを得ない女の嘆きである」と言われると、主題はもう一つ先にあるのではないかと思えて来るのである。

「厭ふ憂き世に身の帰くる」と絶唱し、そのことよってみずからを客観化した了えた時、伊勢は既にこの俗塵のうちに躊躇する己が憂き生きのいのちを越えて、新しき生に転生しているのではないか。その意味では、三類本の「厭ふ憂き身の世に帰らむ」という、疑問詞を言外に置いて疑義する自問自答の形よりも、一類本の疑問も推量も切り捨てた直截な表現の方が遙かにこの物語的部分の主題にかなうようである。

そして、続く一条には、一・二・三類本共に表現の少差を置いて、「とひとりごちて、袖もしぼるばかりに泣きぬらしけり」とある。この伊勢の涕泣にあからめせず目を凝らす作者は、伊勢の歌の左注として客観の叙法に於いて描いたその涕泣のその果てに、新しき生に向けて歩み起そうとする主人伊勢の爾後の生を展望しているのである。そこに作者女房は、同性として同じように愛情世界に傷ついて生きる伊勢が、その傷心より出でて、ひとりの女として自立してゆくそ

の心の形を見究め、更には自分たちの代弁者を見ようとしている。

自らが身を置く社会の秩序は、現実には少しも変わることはなかったとしても、それゆえにこそ、「作歌」という感性と理性のはざまの営為に自らの宿命を越えようとした伊勢と、そうした伊勢の境涯を共感を持って象ってゆく作者、恐らく伊勢の歌につけた割注や或は左注としてそれを象ってゆく作者は、その形象化の方法を『古今和歌集』や、それを延展していったと推定される『勢語』の作者に倣ったのではないかと思う、その『伊勢集』冒頭の物語的部分の作者女房の営為とに、王朝の女流の自衛の生の、その一つの方法を見ることが出来ると言っている、かも知れない。

【評】

再び「裁ち縫はぬ」の歌について。「かきくらし降るいみじう大きな雪」に興味を催した同行の女房たちが「歌詠まむ」と提案したのであるが、伊勢の歌の、競争を指嗾するにはあまりに切実な歌のために結局は伊勢の独詠となって了った「裁ち縫はぬ衣着し人も」の、この歌は実は『古今和歌集』雑上に926番歌として載せられている歌である。それは次の形で載せられている。

龍門にまうでて、たきのもとにてよめる 伊勢

926 たちぬはぬ衣着し人もなき物をなに山ひめのぬのさらすらん

この詞書が言う事実は、恐らく父の大和守在任中のことではあるが、これが『伊勢集』冒頭部分の物語の文脈の中に組み入れられるについては、先の、恋五780番歌の「三輪の山」の歌が伊勢の大和下向の段に極めて自然に延展され得たようには、そうなりうる必然性が殆どない。これは、片桐氏も言われたように、伊勢が龍門寺に詣でて滝の歌を詠んだというだけのことであって、仲平との恋に破れた傷心を癒すための参詣であったとも、その参詣で大雪に遭遇したとも言っている訳ではない。それを『伊勢集』の作者は、女としての伊勢の生き方に照明をあてて、これを物語風に語ろうとする。そのためにこの『古今和歌集』の作歌事情を語る短い詞に代えるに長文の詞書を設け、その後この歌を取りこんでいる訳であるが、実は、この926番の伊勢の歌と二首を隔て、その前に『古今和歌集』は業平の歌を採っているのである。それは、

布引のたきのもとにて、人々あつまりて歌よみける時によめる
なりひらの朝臣

923 ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるかそでのせばきに。

(貫いた緒を抜き取って玉を散らす人がいるようだ——真珠の
ような涙の玉が絶え間なく落ち散ることよ、それを受けとめよ
うにも私の袖はこんなに狭いの)(石田穰二氏 角川文庫『新

版伊勢物語』)

と言うものである。これが『勢語』の第八十七段の「布引の滝」の段に採られていることは周知のことであろう。ところで『古今和歌集』は、業平のこの歌の直前に異母兄の行平の、

ぬのひきのたきにてよめる

在原行平朝臣

922 こきちらすたきの白玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかる。

という歌を、贈答と言うのではなく、同じ布引の滝での詠作として並べて採っている。しかし、『勢語』は、行平のこの歌の方は採らなかつた。そして、その代わりに、同じ行平の歌ながらも、その出典を明らかにしない

わが世をば今日か明日かと待つかひの涙の滝といづれ高けむ。

(自分が実力を発揮できる世を今日か明日かと待つ甲斐もなくして

涙がこぼれるが、その涙が流れ落ちてできる滝とこの滝とどち

らが高いであろう)(石田穰二氏 同右)

という、我が身の不遇を嘆くていの歌(窪田空穂氏は「平安朝の官人の生涯の目的は官位の昇進であり、その遅いのを嘆く歌は実に多く、それは作歌上のひとつの通念となっていた。『勢語』の作者は、『古今和歌集』の行平の歌の「世のうき時の涙」という言葉にその通念をみて——行平は、貞観六年(八六四)、47歳から貞観十四年(八七二)の55歳の時まで左兵衛督であったが、皇孫の身としては物足りない意識

があったかも知れない。——『勢語』所収の歌のように作り替えたのであろう)(『伊勢物語評釈』)と言っておられる)を採って、「かの衛府の督、まづよむ」として、前記の業平の歌の前に置いて贈答の形にして番えているのである。

『勢語』の行平の歌が、窪田氏の言われるように、『勢語』作者による、古今歌の改作であったにしろ、こうして行平の歌に番えられて来ると、業平の歌の歌意は、石田氏の口語訳で示した如く、「(真珠のような)涙の(玉)」と言う、行平の歌に合わせて不遇の嘆きに流す「涙」の語を加え持つようになるのである。と同時に、結句の「そでのせばきに」については、藤井高尚の『新釈』が注する如き「袖のせばき」とは、賤しき人の布の衣は袖などもせばきものなればいへるにて、時にはあはず官位の低きを嘆く心あるべし」という解釈も生まれて来る訳である。こうして『勢語』の作者は、悲運の王家の血を承けて宿命的に生きざるを得なかった業平の不遇の生涯の、その事を業平に身を寄せつゝ、形象化して行った。

そのことに、『伊勢集』の作者は指嗾されて、同じ不幸の境涯——むろん、その不幸の内質は業平とは異なるのではあるが——を生き、そしてその克服に身を削った伊勢への共感を語るべく、業平の歌に踵を接して出て来る「たちぬはぬ」の歌を採って、この龍門の一段を延展構成して行ったのではなかったのだろうか。『勢語』八十七段が

布引の滝での話であり、この『伊勢集』の場面も同じように滝のことを話柄にしていることゆえ、そこに何らかの影響関係を考えてよさそうに思うのである。その、『勢語』が『伊勢集』の上に落した影、そんなものを、『古今和歌集』雑歌上の巻を前にして稿者はいま、改めて想像してみるのである。

第四段

(つかまつりし所) (「はや・」(らせよ・・・)と

かかるほどに、御息所の御もとより、「やがて上りたまひぬ。・

おほせ給ひければ、「はやく上りたまへ。もとより) (こそ

・・・・・宮仕へをせよ

したまへ) (と思はせて) (に)

・・・・・ところを思ひしか。君達をとやは言ひし」と言ふも、死ぬ

(る心地すべ) (「よしなき君だちをはや。思ひかけじ」など言ひ
べく恥づかし。・・・・・)

て、あけて内裏参り) (る)(ひだ) (も見交して・

・・・さでのぼりて、仕うまつりあるくに、この男、文おこせつ

・(れに) (会はで見交すほど) (男あ

つあはむと言へども、聞きも入れであるに、この男の兄なる人、

りける) (あの人によにも訪はじ) (なにかたのみたまふ)

・・・「今は、その男を男と頼みたまふか。あな幼な・・・・。

(へ) (切に) (は見つとも、

我を思ひたまへ」など・言へど、文ばかりをなむ通はしける。

さらに) (であ)

・・・逢はざりけり。

(けしき) (は知りたり) (出で)

かく言ふほどに、元の人もけしきを見聞きけり。女、里に・て、

(秋) (など) (尾花)(なん) (を)

・前栽・のをかしかりける・を、手すさびに尾花を結び

・ (このつらかりし) (来) (詠みたりける、)
たりけるを、はじめの・・・人の見て、・・・・

(り)

九、花すすき我こそ深く頼みしか穂に出でて人に結ばれにける。

(詠み) (物を) ・ ・ ・ ・ ・ (など) (をり) (人)

と・・・て、・・・聞きたることのあるはや」と言ひければ、「数

(・・・・・・・・・など)

ならぬ身は、何か、ともかくもあらむ、同じうは」とて、うちと

(さま) (ひければ、男も) (ひ、女もあはれに思

けたるけしきに言ふを、・・・・あはれと思ふ。・・・・さ

へ)

れど逢はでやりつ。

【通解】

大和滞在の三カ月の後に来た伊勢の、温子後宮への再出仕のことを

語る段である。そこで、年余にして再会した仲平の再びの求愛にも、また思いもかけぬ兄時平の強い求愛にも、伊勢は最早心を動かすことはなかった。かつての稚い恋に涙した悔恨を出でて、伊勢の転身の生が、言葉にそれと明確に語られはじめてゆく、こゝはその最初の段である。通解の口語訳は前段に続けて、西本願寺本系統の本文で付けてゆくことにする。

(主人伊勢の) 大和滞在の日々は、こんな風でございましたが、(その寛平四年の年も秋深い頃)、御息所の温子様の許から、「直ぐにおいでよ。」(と再出仕勧誘のお言葉がございました。)(父君の継蔭様は恐懼して)「宮仕えにきつと専念なされ。そう思うて、そなたを出したのだ。若様を好きになれななどと、ちつとも言いしなかったよな。」と、(娘への叱責は言葉に秘めて) 再びの宮仕えのことを勧めるにつけても、(主人伊勢の心は) 死ぬ程の慚愧にせめがれるのでございました。

(再出仕は明けて寛平五年のお正月のことでございますでしょうか。) 主人は、苦い思い出を振り切るように温子様御奉公専一に勤めておいででした。(それゆえに年余にして再会した) 仲平様が、再びあいたいとしきりに寄こすお手紙だけは受け取っても、もはや褥を共にすることは絶えてございませんでした。(そうする中に、これは主人にとっては全く思いもかけないこと、) 仲平様の兄君の時平様まで

が（思いを寄せて来られて、）「今でも、弟のやつを男として信頼出来ると思っておいでか。もっと大人におなり。私のことを思ってください。てはいかが」と、手紙をお寄こしになるのでございました。（けれど主人伊勢は）手紙だけはもらえば返しも致しましたが、決して体をお許しになることはございませんでした。

そうする中に、仲平様も兄の時平様と主人のことをご存知になったようでございます。（再出仕の一年も秋に入った頃でございましたが、）主人が、（五条の）父君のお邸におさがりになって、秋前裁などの趣きを深めておりますのを、手すさびに結んだりなさっていることがございましたが、（そこに訪ねて来られた）仲平様がそれをご覧になって、尾花が穂を出すように、人目にもおおっぴらに、そなたは兄者と結ばれてしまったのだね、私こそ、そなたと結ばれたいと内心深く頼みにしていたことでしたのに。

と詠まれて、「兄者との事は確かに聞いているよ。」と言葉強く抗議なさいました。（それに主人は、）「人数にも入らないような私ですもの、何でそのような人さまの噂にまでなるようなことがございませう。同じことなら、はじめに許したあなた様と噂になりとうございませした。」とすっかり心を許したかにみえるその様子を、素振りにまでみせて仲平様に対されたのでございました。（それを仲平様は）嬉しうことにお思いのようございましたが、しかし、（主人伊勢は、二

度と）体を許すというようなことだけは、決してございませんでした。

【注解】

○かかるほどに、御息所の御もとより、「やがて上りたまひぬ。宮仕へをせよとこそ思ひしか。君達をとやは言ひし」と言ふも、死ぬべく恥づかし。「御息所の御もとより」は、文脈として第三行の「といふも」が承けるところであるが、「やがて・・・言ひし」の御息所の言葉を「いふ」という敬語を落した常態表現が承けるのは腑に落ちない。こゝは三類本では「『はや上らせよ』とおほせ給ひければ」（二類本も同意の文で「『はや上りせよ』と召したりければ」である）とあるから、「やがて上りたまひぬ」のあとに、「とおほせ給ひければ」或は「と召したりければ」の脱落を認めて、そのあとの「宮仕へをせよとこそ思ひしか。君達をとやは言ひし」は、再出仕を促がして来た温子の言葉をうけて、再びの宮仕へを勧める父親の言葉とみ、これを「いふ」が承けていると処理すべきところである。また、「やがて上りたまひぬ」の「ぬ」は命令形の「ね」の誤写であろう。更に三類本の本文について言えば、第三行目の「と思はせて言ふに」の難解箇所の「思はせて」は、秋山氏の処理された如く衍文と認めるべきところである。

「やがて」は「直ぐさま、即刻」の意。次条のはじめに「さてのぼ

りて、」とある部分の三類本の本文は「あけて内裏参り」とある。伊勢の再出仕は、『伊勢集』冒頭の物語的部分の時間に即して言えば、前段の正月十一日ばかりの「龍門詣で」のあと、一年に近い時を経て後の翌寛平五年正月のことになる。

温子は、伊勢が再出仕をためらう理由をよく知っていて、それには触れず、労わるように「直ぐにおいでよ」と言うのである。父の継蔭も、温子の温情がよく分かる。そして、それ以上に娘の気持もよく分かる。「宮仕えに、きつと専念なされ。そう思うて、そなたを出したのだ。若様を好きになれんどちつとも言いはしなかつたよな。」

「君達をとやは言ひし」、つまり「貴公子を好きになれとは言わなかつた」とずいぶん皮肉をきかせた表現で娘に迫っている、と言う片桐氏の読み方もあるが、この「やは」の「や」は反語というより、父親の、娘の過ちに対してこれを咎めるのに逡巡するころを述べた「疑問」と取りたいところ。直前の「宮仕へをせよとこそ思ひしか」の強意表現に、娘に対する叱責の思いを秘めて、こゝは、取り返し得ぬ悔恨を娘と共に嘆く父親の情をうつしたところである。そういう父親であつてみれば、伊勢も、その死ぬ程に恥づかしい慚愧の思いを素直に口にすることが出来るのである。その伊勢の悔恨を「……といふも、死ぬべく恥づかし」という。「と（父親の）いふそのことも」と並記の表現で作者女房は書く。自らの稚なさを悔い恥じる思いは、父親の言葉をま

つまでもなく既に早くから伊勢のものであり、作者女房もまた早くから主人伊勢の、その悔恨の側にいたのは前第三段でみた通りである。その長い悔恨の時間が、今反転して、伊勢に新しい出直しの時を約束することになる。それを言葉にして言うのが次条の三類本本文である。

「よしなき」は効果のない、やっても無駄なという意。「愛しても所詮は無駄な権門の貴公子」ということである。「やは」は「やは思はむ」の意。（原文の「はや」は誤写であろう。稿者）思うだろうか、思いはしないと反語の形をとっているのである、と片桐氏は注しておられる。

二類本は、こゝに相当するところに、

名にたて、伏見の里といふことは紅葉を床としける成けり

という歌を京へ上る途次の「伏見」での即興として入れている。こゝにその歌を京へ上る途次の「伏見」での即興として入れている。こゝにその歌を夫々134・132番歌として、後続家集の中に収めているが、それは初句と四・五句を夫々「名にたちて」「床にしけばなりけり」としてあり、これは『後撰和歌集』が雑四の¹²⁹⁷番歌に「よみ人しらず」として収めている歌と同表現である。これについては、島田良二氏が「この歌は後撰から『伊勢集』に入ったと思われる、特にこゝに挿入したのである」と言われている。特にこゝに入れたのは、或は「龍門寺詣で」の帰途に「越部」で歌を詠んだ前段の、その形に並べてこゝを構成しようとしたものかも知れ

ないが、三類本の「よしなき云々」の条と共に、こゝはあらずもがなの蛇足という気がする。

○さてのぼりて、仕うまつりあるくに、伊勢の再出仕の生活がはじまるのである。前記の如く、この条の三類本の本文は「あけて内裏参り」である。『伊勢集』冒頭の物語的部分の時間で言えば、「大和へくだ」（二類本の本文）ったのが寛平三年（八九一年）の秋、その年明けの寛平四年正月に龍門寺に詣で、この年の秋頃より温子からの再出仕勧誘のことが続いていた気配で、再出仕は翌寛平五年（八九三年）の正月のこととなる。伊勢は既に、17歳から22歳頃の年盛りに達していた。その再出仕を「仕うまつりあるく」とある。「あるく」は「ありく」と同意で、動詞の連用形について「あちこち……する。動きまわって……する」「絶えずあれこれと……して月日を送る」と使うことは、伊勢は苦しい出を振り切るようにして宮仕えに専念するのであろうか。

そういう伊勢の前に再び、「この男」仲平が言い寄って来るのであった。

○この男、文おこせつつあはむと言へども、聞きも入れであるに、その仲平のことを「この男」と書く。直ぐあとに「元の人」「はじめの人」とあり、一段隔てた第六段にも「はじめの男」とある。それらの表記に比べて、「この男」の「この」は、大和での傷心の日々、

伊勢の心を離れることのなかった存在としての仲平がいたことを語っている。しかし、その仲平の「あはれに」（三類本）言って寄こす「あはむ」という言葉に伊勢は応じなかった。「文おこせつつあはむ」と言へども、聞きも入れである」という。「しきりに寄こす文は受けとつても、もはや褥を共にすることは絶えてなかった」と言うのである。

○この男の兄なる人、とところが、伊勢にとっては全く思いもかけぬことに、仲平の兄の時平までもが、こゝで意中を示して来ることになる。三類本は「この男の兄なる男ありける」と第二の男の出現を徐に紹介するのだが、この男が時平であることは、直ぐ次段に構成されている（二・二番歌の贈答が『後撰和歌集』恋四、830・831番歌に、
○伊勢なん人にわすられてなげき待るとききてつかはしける

贈太政大臣

返し

伊勢

として、その作者名を明記してあげてあることからはっきりしている。時平は、延喜九年（九〇九年）に39歳の若さで世を去るのだが、その時左大臣であった彼に、後に太政大臣の称が贈られたので「贈太政大臣」と『後撰集』は表記した訳である。（片桐氏『伊勢』）

○文ばかりをなむ通はしける。逢はざりけり。時平は「今でも、

弟のやつを、男として信頼出来ると思つてゐるのか。もっと大人になりなさい。私のことを思つてはいかが」と手紙を寄こす。しかし、主人伊勢は「手紙だけはもらえば返しでしたが、決して体を許しはしなかつた」のだ、と作者女房は書く。秋山氏は、この間の藤原兄弟との交渉の経緯について、伊勢の心情が、そしてその覚悟が説き尽されてゐるものとして臼田甚五郎氏の『伊勢』の一文を次のように紹介されている。

さて都に著いて、温子様の御傍に登つてお仕へ申す。夢みるやうな過ぎし日と違つて、しゃんとした気持を持つ女に生れ變つて来たのである。かういふ変化を人が気付いたかどうか。伊勢の再出現は忽ち御簾の内から外へ知れたらしい。伊勢の消息に誰よりも耳を敬てるのは仲平である。時の大将だか大臣だかの女に通つたのは政略上の意味が存したのであつて、仲平は伊勢を裏切る程の心ではなくしばし離れたのであらう。さういふと何だか狡いやうだが、男がひろく情をそぐといふ事は当時としては珍しい例ではなく、寧ろ伊勢の純粹なる稟質が希なる烈しさを発したと考へる方が當つてゐる。従つて仲平には伊勢が忘れられない。一年ぶりの出現に、伊勢の心の扉を再び開くべく、仲平は手紙を遣しながら、あはうと言ふのであつた。だが、世のつねの心を知つて、世のつねの心になる事を伊勢の稟性は肯じない。仲平を憎悪する

よりは、若き日の行為に対する悔恨は彼女の純粹を鋭い刃と化して、彼女自身に突きささるのであつた。仲平の願ひはきき入れられなかつた。

そしていっぽう、時平は、権利と言つてはをかしいが、彼自ら申し入れの権利があると思つたらう。「今は、その男を男と頼みたまふか云々」は、仲平が余所に通つてゐる間に、弟に先を越れてゐた時平が下心あつて言ひ送つたものであらう。しかし、このやうな時平の俗情は伊勢の承認出来ない所であつた。

○「花すすき我こそ深く頼みしか」の仲平の歌。仲平と時平と、兄弟二人して言い寄つて来る。男の身勝手さや、男の嫉妬心や競い心や、そんな男のさまざまを見ながらも、最早、伊勢の心は容易に動じはしなかつた。宮仕えに専念する再出仕の一年も秋に入った頃、伊勢は温子の許しを得てか、里住みの何日かを、恐らく父の邸である「五条わたり」と覺しき住居で送ることになるのだが、その庭前に秋を深めてゐる前栽をも「すすき」に結ぶころの平安を持っていた。そこに仲平が訪ねて来る。「はじめの人の見て」は、二類本では「はじめの人来て見て」、三類本では「このつらかりし人の来て詠みたりける」と次第に具体的になつてゐる。兄の時平が、伊勢への接近を強めてゐることを目撃もし、噂にも聞く仲平としては気が気でなかつたのである。「かく言ふ（時平と伊勢との文通ひが続いてゐる）ほどに元

の人もけしきを見聞きけり」とある。「けしき」は、類義語の「けはひ」が聴覚的な認知に使うのに対して、視覚でとらえられる様子、状態を言う。二人の交渉を目のあたりにすることもあったのであろう。

仲平の歌の初句「花すすき」は、第四句の「ほにいでて」に係る。

一首、「穂に出でて」は、「花すすき」||「尾花」が穂を出すように、人目に立つまでおおっぴらに、そなたはあの兄者と結ばれてしまったのだね、私こそそなたと結ばれたいと内心深く頼みにしていたのに、の意である。

この場面構成のよりどころとなったかに推定される『古今和歌集』恋五、748番歌の仲平の歌では、その第二・三句が「我こそしたに思ひしか」となっている。佐伯梅友氏はこれに注して、「花すすきを結ばうと、自分こそ内心思っていたことだったがの意で、女をすすきにたとえ、これが大きくなったらわがものにしたいと目をつけていた事をいう。それがいよいよよ穂として出たら、つまり成人してみたら、人に結ばれてしまったことだ。」と、早く見初めた女が人の物になってしまったことを嘆く歌だという風に説いておられる。(『日本古典文学大系・古今和歌集』二五〇頁)『古今集』に「題しらず」として収める、この伝承歌めいた仲平の独詠を、こゝでは『伊勢集』の特定の文脈の中に延展させて、兄時平との仲を伊勢に対して抗議する対詠の歌にとりなしているのである。作者女房の手柄と言うべきか。

○されど逢はでやりつ。伊勢は、しかし、仲平のその抗議を面と

向っては取り合わない。「人数にも入らないような私ですもの、何でそのような人さまの噂にまでなるようなことがございました。同じことなら、はじめに許したあなたさまと噂になりとうございました」と、わざわざ実家までやって来た男に心を許したかにみえるその様子を、素振りにまでみせて仲平に対するのである。「うちとけたるけしきに言ふ」、それを仲平は嬉しいと思う。しかし、伊勢は、二度と体を許しはしなかった。「されど逢はでやりつ」と言うのである。

秋山氏はこの伊勢のとりなしを、男の接近に対して、なびくかのとき素振りを見せつつ、結局は拒否することになるのだが、実は拒否の決意こそが、かえって、思わせぶりに相手に期待を持たせる姿勢を構えているのだといえよう。「さういふ恋愛作法に就いて、伊勢も一人前になってゐた」と臼井氏の言葉をあげながら、更に先に引用した同じ臼井氏の言葉を下敷にして、「男を翻弄するかのような彼女の態度は、男への返報というよりは、かって無垢の愛の挫折を余儀なくされた自己を、きびしく裁く姿勢を押し立ててもいるのだと解されよう」と言っておられる。

伊勢の転身の生が、言葉にそれと明確に語られはじめてゆく、こゝはその最初のところである。第二・三段に於いて、『伊勢集』の作者女房は、伊勢の歌につけた割注や左注によって、主人伊勢の転身の生

高松短期大学研究紀要

第 18 号

昭和63年 3月15日 印刷

昭和63年 3月25日 発行

編集発行 高松短期大学

〒761-01 高松市春日町960

TEL (0878) 41-3255

FAX(0878) 41-7158

印刷 高東印刷株式会社

高松市東山崎町596番地